

声に出して読む万葉集 第四十七回

卷八 其の一

歌数／短歌二三六首、長歌六首、旋頭歌四首、時代／ほぼ年代順、舒明・聖武天皇（一七四三
一）、部立／春雑歌・春相聞・夏雑歌・夏相聞・秋雑歌・秋相聞・冬雑歌。冬相聞

春雑歌 （短歌二八首、長歌二首）

一四一八

〔題詞〕 志貴皇子のよろこび權の御歌一首

〔原文〕 石激 垂見之上乃 左和良妣乃 毛要出春尔 成来鴨

〔訓読〕 石いはばし走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも

▼注釈

志貴皇子Ⅱ天智天皇の第七皇子。

石激Ⅱ「石いはそそぐ」（岩に激しく水が打ちあたる）の訓みと「石いははしる」（水が石の上を走って
激しく流れる）の訓みがある。大谷雅夫著『万葉集に出会う』（岩波新書）を参照。

一四一九

〔題詞〕 鏡王女歌一首

〔原文〕 神奈備乃 伊波瀬乃社之 喚子鳥 痛莫鳴 吾戀益

〔訓読〕 神なびの石いはせ瀬の社の呼子鳥いたくな鳴きそ我が恋まさる

▼注釈

鏡王女Ⅱ鏡王の娘、額田王の姉か。藤原鎌足の嫡室。

岩瀬の杜Ⅱ生駒郡斑鳩町の近辺にあった森と考えられる。

呼子鳥Ⅱ鳴き声が人を呼ぶように聞こえる鳥。今のカッコウとするのが通説。

〔題詞〕 駿河采女歌一首

〔原文〕 沫雪香 薄太礼尔零登 見左右二流倍散波 何物之花其毛

〔訓読〕 沫雪^{あわゆき}かはだれに降ると見ると流らへ散るは何の花そも

▽語釈

はだれⅡ雪がはらはらと散つてつもるさま。梅の落花を雪に譬えるのと関係があるかも知れない。

〔題詞〕 尾張連の歌二首〔名闕〕

〔原文〕 春山之開乃乎為里尔 春菜採妹之白紐 見九四与四門

〔訓読〕 春山の咲きのをりに春菜^{はるな}摘む妹^{いも}が白紐^{しろひも}見らくしよしも

▽語釈

ををりⅡいっぱいに茂りあう。

〔原文〕 打靡 春来良之 山際 遠木末乃 開往見者

〔訓読〕 うち靡^{なび}く春来るらし山の^ま際の遠き木末^{こぬれ}の咲きゆく見れば

〔題詞〕 中納言阿倍廣庭卿の歌一首

〔原文〕 去年春 伊許自而殖之 吾屋外之 若樹梅者 花咲尔家里

〔訓読〕 去年^{こぞ}の春いこじて植^こゑし我がやどの若木^{わかき}の梅は花咲きにけり

▼注釈

中納言阿倍広庭卿Ⅱ神龜元年（七二四）七月従三位、同四年中納言、天平四年（七三二）没。時に作者、七十余歳（中西進）。

いこじてⅡイは接頭語。根を掘り起こしての意。

一四二四

〔題詞〕 山部宿祢赤人歌四首

〔原文〕 春野尔 須美礼採尔等 来師吾曾 野乎奈都可之美 一夜宿二来

〔訓読〕 春の野にすみれ摘みにと来し我れそ野をなつかしみ一夜寝^{ひとよ}にける

一四二五

〔原文〕 足比奇乃 山櫻花 日並而 如是開有者 甚戀目夜裳

〔訓読〕 あしひきの山桜花日並べてかく咲きたらばいたく恋ひめやも

一四二六

〔原文〕 吾勢子尔 令見常念之 梅花 其十方无所見 雪乃零有者

〔訓読〕 我が背子に見せむと思ひし梅の花それとも見えず雪の降れば

一四二七

〔原文〕 従明日者 春菜将採跡 標之野尔 昨日毛 今日母 雪波布利管

〔訓読〕 明日^{あす}よりは春菜^{はるな}摘まむと標めし野に昨日^{きのふ}も今日も雪は降りつつ

一四二八

〔題詞〕 草香山の歌一首

〔原文〕 忍照 難波乎過而 打靡 草香乃山乎 暮晚尔 吾越来者 山毛世尔 咲有馬酔木乃 不惡 君
乎何時 往而早将見

〔訓読〕 おしてる 難波^{なには}を過ぎて うち靡^{なび}く 草香^{くさか}の山を 夕暮れに 我が越え来れば 山も狭^せに 咲
ける馬酔木^{あしび}の 悪^あしからぬ 君をいつしか 行きて早見む

〔左注〕 右一首は、作者^い微^やしきによりて名字^な顕^{あらは}さず。

一四二九

〔題詞〕 櫻の花の歌一首〔并短歌〕

〔原文〕 □孀等之頭挿乃多米尔 遊士之 蘊之多米等 敷座流 國乃波多弓尔 開尔鷄類 櫻花能
丹穂日波母安奈尔

〔訓読〕 娘子らが かざしのために 風流士のかづらのためと 敷きませる 国のはたてに 咲き
にける 桜の花の にほひはもあなに

▽語釈

はたてⅡハタはハテ（極）の古形。テはチと同根、方向の意。はて。

あなにⅡアナは感動詞。ニは間投助詞。強い感動を表す語。ああ、ほんとうに。

一四三〇 反歌

〔原文〕 去年之春 相有之君尔 戀尔手師 櫻花者 迎来良之母

〔訓読〕 去年の春逢へりし君に恋ひにてし桜の花は迎へけらしも
こぞ

〔左注〕 右の二首は、若宮^{わかみやの}年魚麻呂^{あゆまろ}（伝未詳）の誦^よみしものなり。

一四三一

〔題詞〕 山部宿祢赤人の歌一首

〔原文〕 百濟野乃 芽古枝尔 待春跡 居之鶯 鳴尔鷄鵲鴨

〔訓読〕 百濟野の萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむかも
くだらの ふるえ を

一四三二

〔題詞〕 大伴坂上郎女の柳の歌二首

〔原文〕 吾背兒我 見良牟佐保道乃 青柳乎 手折而谷裳 見縁欲得

〔訓読〕 我が背子が見らむ佐保道の青柳を手折りてだにも見むよしもがも
さほぢ あをやぎ たを

一四三三

〔原文〕 打上 佐保能河原之 青柳者 今者春部登 成尔鶏類鴨

〔訓読〕 うち上る佐保の川原の青柳あおやぎは今は春へとなりあにけるかも

▽語釈

うち上るⅡ川に沿つてのぼつてゆく意で地名「佐保の川」にかかる枕詞。

一四三四

〔題詞〕 大伴宿祢みはやし三林（伝未詳）の梅の歌一首

〔原文〕 霜雪毛 未過者 不思尔 春日里尔 梅花見都

〔訓読〕 霜雪しもゆきもいまだ過ぎねば思はぬかすがに春日の里に梅の花見つ

一四三五

〔題詞〕 厚見王あつみのおほきみの歌一首

〔原文〕 河津鳴 甘南備河爾 陰所見而 今香開良武 山振乃花

〔訓読〕 かはづ鳴く神奈備川に影見えて今か咲くらむ山吹の花

▼注釈

厚見王Ⅱ系譜未詳。天平感宝元年（七四九Ⅱ天平勝宝元年）四月無位より従五位下、天平勝宝六年七月皇太后の葬送の装束使、同七年十一月伊勢奉幣使、時に少納言、天平宝字元年（七五七）十五位上。

一四三六

〔題詞〕 大伴宿祢村上の梅の歌二首

〔原文〕 含有常 言之梅我枝 今旦零四 沫雪二相而 将開可聞

〔訓読〕 含めりふふと言ひし梅が枝えけさ今朝降りし沫雪あわゆきにあひて咲きぬらむかも

▼注釈

大伴宿祢村上Ⅱ天平勝宝六年（七五四）正月民部少丞、宝龜二年（七七二）四月正六位上より従五位下、同十一月肥後介、同三年四月阿波守。

一四三七

〔原文〕 霞立 春日之里 梅花 山下風尔 落許須莫湯目

〔訓読〕 霞立つ春日かすがの里の梅の花山のあらしに散りこすなゆめ

一四三八

〔題詞〕 大伴宿祢駿河丸歌一首

〔原文〕 霞立 春日里之 梅花 波奈尔将問常 吾念奈久尔

〔訓読〕 霞立つ春日の里の梅の花花に問はむと我が思はなくに

▼注釈

大伴宿祢駿河丸Ⅱ大伴坂上二嬢に求婚。天平一五年（七四三）五月、正六位上より十五位下、天平宝字元年（七五七）八月、橘奈良麻呂の乱に参加して弾劾され、後許される。宝龜六年（七七六）九月参議、同十一月蝦夷討伐の功により正四位上勲三等、同七年没、従三位を贈られた。

一四三九

なかとみのあそみむらじ

〔題詞〕 中臣朝臣武良自（伝未詳）の歌一首

〔原文〕 時者今者 春尔成跡 三雪零 遠山邊尔 霞多奈婢久

〔訓読〕 時は今は春になりぬとみ雪降る遠山の辺に霞たなびく

一四四〇

かわへのあそみあづまひと

〔題詞〕 河邊朝臣東人（伝未詳）の歌一首

〔原文〕 春雨乃 敷布零尔 高圓 山能櫻者 何如有良武

はるさめ たかまと

〔訓読〕 春雨のしくしく降るに高円の山の桜はいかにかあるらむ